

「第8次パレスチナ医療・子供支援活動」報告

期間：2016年11月3日～11月23日



北海道パレスチナ医療奉仕団
Hokkaido Medical Service for Palestine (HMS4P)

皆様へのお礼と「第8次パレスチナ医療・子供支援活動」の概要

団長 猫塚 義夫

皆様からの温かなご支援で、「第8次パレスチナ医療・子供支援活動」を無事終えることができ、心から感謝申し上げます。今年度も「第9次」への準備の中ですが、皆様へのお礼をこめて「第8次」の報告をいたします。これからもご支援をよろしく願いいたします。

期 間： 2016年11月3日から11月23日

メンバー： 猫塚義夫（団長 整形外科医師）、白山晴雄（事務局）、齊藤 育（教員）

2010年7月「北海道パレスチナ医療奉仕団」が結成され、今年で8回目の医療支援活動です。これも皆様からの支援によるものであり、心から感謝いたします。

2015年11月の第6支援活動では、ガザ地区において運動療法の一環として「腰痛体操」の普及を国連パレスチナ難民救済事業機関（以下、UNRWA）など現地医療関係者と検討を始めました。また、子供たちへの「支援」を東エルサレムのシュファット難民キャンプで行ない、これからの活動の土台を作ることができました。

帰国後、札幌市立清田高校グローバルコースの協力も得て「腰痛体操」のDVDを作成し、2016年4月の第7次支援活動で、UNRWAなど現地の意見を参考にして完成することができました。

一方、現地でイスラエル当局は、ヨルダン川西岸での「入植活動」を続け、ガザ地区ではこれまでの『人と物の完全封鎖』に加えて、地下数十メートルの『地下分離壁』の建設を始めました。これでは、ガザ地区への『地下水の封鎖』で、ガザ地区の砂漠化を招くものです。イスラエルの侵攻による「虐殺」とともに、水を断たれる200万人のガザ住民は、毎日毎日が「緩慢な殺戮」状態に置かれることになってしまいます。

今回の支援活動では・・・

- 1) 医療活動として、診療活動と「腰痛体操」のDVDを用いて難民キャンプでの「運動療法」の普及を行います。
- 2) 今回も悲惨な状況に置かれている子供たちに向けて「子供ワークショップ」を行いつつ、日本の子供たちとの交流と次回に予定しているスポーツ交流の準備を行ないます。
- 3) ガザ地区と西岸でのパレスチナと住民が置かれている現状をつぶさに把握し、皆さんに報告いたします。
- 4) シリア問題と「イスラム国」(IS)につて、中東問題の根源である「パレスチナ」からその現状と方向性を学びます。
- 5) 安倍政権による「安保法制」の下、「集団的自衛権」行使が予想される中東で、日本の平和憲法を基軸にした「中東和平」への貢献のあり方を実践的な方法で検証したいと思います。

また、何かのために弁護士さんを含めた「在札本部」を立ち上げています。

本部長：宮島豊 副団長、本部員：クイン明美、松本一敏、西岡利泰、長谷川昭一、清末愛沙、高崎暢弁護士

第8次パレスチナ・ガザ医療・子供支援活動「行程」 2016年11月3日～11月23日

11月3日	木	8:40 千歳発 猫塚、白山、齊藤	20:20 テルアビブ着
4	金	エルサレム① 「行程」 打ち合わせ	
5	土	エルサレム② 「定点観測」	
6	日	ガザ① 「入国」	
7	月	ガザ② 南極授業	
8	火	ガザ③ リマール診療所診療	ベイトハヌーン難民キャンプ・イマンサン宅
9	水	ガザ④ リマール診療所診療	ハンユニス診療所・懇談 国境漁民訪問漁民訪問
10	木	ガザ⑤ 「出国」 UNRWA 教育局	
11	金	エルサレム③ ビリン村へ・・・国際平和デモ参加	ラニー氏へ医療材料寄贈
12	土	エルサレム④ シュファット難民キャンプへ	スポーツ交流準備/「平和のポスター」 齊藤育さん テルアビブ発
13	日	エルサレム⑤ シュファット難民キャンプ診療所	診療
14	月	エルサレム⑥ シュファット難民キャンプ診療所	診療
15	火	エルサレム⑦ 「独立記念日」	歴史の町ヤーファ視察
16	水	エルサレム⑧ シュファット難民キャンプ診療所	診療 ベドウィン集落無料検診
17	木	エルサレム⑨ シュファット難民キャンプ診療所	診療
18	金	エルサレム⑩ 「定点観測」	
19	土	ヘブロン 旧市街、シュハダ通り、(YAS: イッサ・アムロ氏)	
20	日	ジェリコ① [定点観測]	ジェリコへ移動
21	月	ジェリコ② アクバトジャベル難民キャンプ診療所	診療 エルサレムへ移動
22	火	22:10 テルアビブ発	猫塚・白山
23	水	21:25 千歳着	

「第8次パレスチナ医療支援」活動の報告

「北海道パレスチナ医療奉仕団」猫塚 義夫

皆様のご支援で、「第8次パレスチナ医療支援活動」を無事終えることができました。今回は、その概要を「日記」形式で報告いたします。皆様からの御意見、御要望をいただきこれからの活動の活かしてして行きたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

1日目 11月3日 (木)

～エルサレムへ到着～

本日、新千歳空港を発ち韓国・仁川経由で、テルアビブからイスラエルに入国しました。今回も UNRWA から発行された『活動証明書』の提示とガザ地区とヨルダン川西岸における医療活動の趣旨の説明により、大過なく入国することができ、乗り合いバスでエルサレムへ……エルサレムでの宿舎となる AZZHRA Hotel へ到着。地元若者の結婚式に遭遇し、……幸先よいスターかもと緊張する心を落ち着かせました……。

夜は、機内で読みかけていた青木理さんの著作「日本会議の正体」(平凡新書)を読み終えてからぐっすり就寝。『極右』であり、『超国家主義団体』である日本会議を主導する「宗教右派」団体が、ここイスラエルにおけるユダヤ教原理主義者たちと妙に共鳴し合うことが偶然ではないような気がしてなりません。

2日目 11月4日 (金)

～イスラエルの軍事支配とイスラエル人も参加する「入植地反対デモ」参加～

朝食後、早速行動開始。毎回行なうエルサレム市内の「定点観測」のためです。観光客で賑うダマスカス門へ……。途中、イスラエルの警察署前に止めてある装甲車は、まるで軍用車並みの頑丈さです。これでパレスチナ人を「取り締まる」のです。これに倣い、近年、米国でも警察の軍事装備化が進められているのです。

ダマスカス門では、今まで通りイスラエル軍兵士が自動小銃を抱えてパレスチナ人への監視を続けています。その中には女性兵士も鋭い眼で通り行く市民を睨みつけています。そして、時々パレスチナの青年に銃を突きつけ「路上尋問」を行うのです。これはもう全くの日常風景となっているのです。ここでもまた、「尋問」されたパレスチナ青年の「人格＝人間」を否定された無念さを見てとれるのです。



「尋問」するイスラエル兵

午後からエルサレム市内・シェイクジャラ地区で、毎週金曜日午後3時から開催されるイスラエルの入植地反対行動に参加しました。ここでは、交通量も多くイスラエル人を含む40～50名の人々がスタンディングで「入植地反対・反占領」を訴えていました。今年4月にお会いしたメンバーもいて、互いに再会を喜びあうことができました。強固なパレスチナ占領国家イスラエルの中にも政権のやり方に反対する市民のいることは、占領と暴力に苦しむパレスチナ人に多くの励ましをもたらすものではないでしょうか。

明るい表情で「STOP THE OCCUPATION」(占領を止めよ!!)のプラカードを掲げるパレスチナ人は、日々イスラエルの入植者から立ち退きの攻撃を受けているのですが、負けてはいません。こうし



シェイクジャラ地区の「反占領デモ」

た人々と接していると、「パレスチナ支援」への勇気がツツツと湧いてくるのです。

一方、私の住む札幌でも毎週金曜日18:00～20:00まで、北海道庁北門で取り組まれている「泊原発再稼働反対」の集会を思い出します。帰国後は、このことを皆さんに報告しようと思います。

3日目 11月5日 (土)

～エコ教育を実践するエルサレム市立学校へ～

本日もダマスカス門の周囲は、昨日と同じようにイスラエル兵たちがたむろしながら市民の監視活動が行われていました。

午前中はエルサレムの南、ベツレヘムの近くにある市立学校を訪問しました。移動途中、バスの窓から見えるには、新しく建設されている真新しい「入植者用アパート」です。

1歳から21歳までの小・中・高・短大レベルの生徒と学生が学んでいました。(パレスチナとエルサレム、イスラエルの教育シテムの詳細は別の機会に譲りますが、この学校の特徴は、「教育と環境と健康」を中心課題としているとこ

ろです。)

校庭には、無農薬農法の試用、生徒自ら作る校庭のモニュメント、その材料も廃材や古タイヤでした。小さいながらも卓球台やミニバレーコートなども作られているのです。

また、雨水をためてトイレの洗浄液とする徹底した循環社会の試みが子供たちの手で進められているのです。

極めつけは、パレスチナ社会ではまづ見かけることのない「ごみの運別」教育を実践して老いるところなのです。

こうして、パレスチナとイスラエルの被占領対占領という非照的な社会構造の中でも子供の内から、「平和的な改善政策」の芽が着実に広がりつつあることを見るのです。

午後からは、現地で活躍されているJVC（日本国際ボランティアセンター）のパレスチナ事業現地調整員である並木麻衣さんとお会いすることができました。以前、私の勤務する医療機関の機関紙で並木さんの論文を拝見していたので、直接お会いできて光栄でした。次回の再会を約束してお別れしました。

いよいよ明日からは、ガザ地区北部にあるエレッツ検問所からガザ地区への「入国」です。今回で4回目の「ガザ行」になります。これも UNWRA 医療局長である清田明宏先生の御尽力によるものです。

さあ～、明日6日朝から、ガザに「入国」となります。ガザの人々のために微力を尽くす所存です。

一段と気の引きしまるエルサレムの夜です。

4日目 11月6日(日)

～いよいよ「ガザ地区」へ～

午前10時にUNマークのついたUNRWAの車が宿舎まで出迎えに来てくれました。

一路、現在唯一ガザ地区を出入りできるエレッツ検問所へ車を走らせました。そ

の途中道路の両側が肥沃な農業地域です。本来であればパレスチナ人が農業を行う土地ですが、今はイスラエル人入植者の手で農産物が生産されているのです。

ガザの住民からのお話では、ここでつくられガザに持ちこまれる野菜は、農業汚染にまみれたものであることが強調されていたのを思い出しました。ガザ地区の水と農作物の汚染は、住民の健康破壊に暗い影を投げかけているのです。いつかは、実態を明らかにし、イスラエルにいるパレスチナ人の「緩慢な殺人」を国際的にも告発しなくてはなりません。

1時間位走ると EREZ CROSSING POINT（エレッツ検問所）が見えていました。空港ターミナルを思わせるような大きな建築物です。世界で一番セキュリティがきつい検問所といわれており、そのシステム・ノウハウは、アメリカや日本をはじめ多くの国で使われているとのことなのです。



エレッツ「検問所」の全景

いつもより人数が大幅に少なく「閑散」とした状態でした。しかし、そこにも入植者＝民兵が重厚な自動小銃を肩からぶら下げて、あたりかまわず病的とも思われる鋭い眼光であたりを見渡し歩哨しているのです。

イスラエルからガザへの「出国審査」は、今回比較的容易で3人目の通過は何の質問の無いありさまです。これもUNRWAからの「活動証明書」が大きな力を発揮してくれたものと思われました。

これに自信を得たわけでもありませんが、狭い検問所通路や鉄格子の回転ドア、そして1.5Kmにわたり延々と続く金網で囲まれた通路、またそこから見える不気味な分離壁を映像と画像に丹念に記録しながらハマス政権が管理するガザ地区

の入国管理事務所に向かうのでした。

さあ・・・ここから人口二百万人を擁する「天井の無い牢獄」に足を踏み入れるのでした。



エレッツ「検問所」にある1.5Kmの全網通路

ガザ地区内でも国連UNRWA所有で、防弾処置を施したランドクルーザーの迎えが待っておりそのまま、UNRWA・GAZA FIELD OFFICE(GFO)へ行き、明日からの「支援活動」の目的・希望事項を話し、現地とのスケジュールを調整しました。

診療と私達が作製した「腰痛体操」のDVD、さらには新たに妊婦さんの運動療法を検討する胸を申し入れ快諾をいただきました。早速、妊婦さんとのインタビューが設定されました。また、ガザでの活動期間の移動も国連車を出してくれることになりました。

GFO本部の近くには、ISLAMIC大学とAL AZAR大学の二つの大きな大学があり、ここは大学生と中心とした若者に溢れていました。しかし、深刻なのは『封鎖状態』が続くガザでは大学を卒業しても働く場所がない・・・いわば、就職のメチが立たない失業が待っているのですから・・・

宿舎から見えるガザ港を走る小舟が通った後に残る船跡が白ではなく、茶色がかって見えるのです。最初、光の加減かと思いましたが、やはり汚染水の排洩



ガザ港を走るボート

による港の「海洋汚染」なのかも知れません。「完全封鎖」の続くガザ地区では、燃料不足により污水处理施設が稼働せず、汚水のまま海に放出されるのですから「海洋汚染」が発生していることが分かりました。

昼食後、宿舎に3年前に札幌に招いた、マカドマ先生が来てくれました。半年ぶりの再開です。以心伝心、なんでも話せる先生ですので、遠慮なく私達の希望を伝えました。

1) 来年に向けた、ガザ地区の小学校高学年を対象にした「子供ワークショップ」の準備

2) これも来年予定している中高生を対象としたバレーボールの指導と普及・交流について、ガザ市内にあるバレーボールチームの監督とお会いして来年の実施準備を図ること。

3) 2014年のイスラエルによる「ガザ侵攻」により多大の被害を受け、いまだ十分な復興ができないベイトハヌーン難民キャンプとそこで頑張るイマンさんを訪問すること。

4) 過去3年間北海道大学工学部大学院に留学し、汚染水処理の研究で国際学会賞をいただいていた Reem さん宅の訪問。

マカドマ先生が、私達のスケジュールの合間をぬってすべてアレンジしてくれました。

特に、4)の Reem さん宅の訪問はその後一時間半後に実現したのです。なんと素早い行動力なことか……!!! 私も見習わなければと心に刻みました。

Reem さんで家族とのアラブ料理の食事と歓談を終えて、来年の再会を約束してマカドマ先生の運転で宿舎へもどりました。ここからは、日本リザルツから来ている吉田美紀さんも合流……。

案の定、イスラエルの「完全封鎖」による燃料不足、それに起因する電力不足が「ガザの漆黒の夜」を招いていたのでした。

そのせいあつてか、デジカメでもお月さんのクレーターを鮮やかに写す事が出来るのは、さすがにガザの夜の暗さ・漆黒を意味していると思いました。

さあ、明日からガザでの活動が始まります。

5日目 11月7日(月)

～「ガザ地区」小中学校と南極・昭和基地の衛星ライブ中継～

本日、午前中は大変面白く、また意欲的なイベントがありました。

南極の昭和基地とガザ地区・ビーチ難民キャンプにある UNRWA 所属のアスマ女子小学校を衛星中継(スカイプ)で結んだ授業が行われました。この学校は、約1,100人の生徒たちが2部授業を行っているところです(実際にはその倍の2,200人の生徒がいます)。選ばれた約30名の生徒(日本では中学1年生に相当)達と昭和基地の第57次観測隊の森川博久先生との間で、南極について多面的に学んでいました。

質問コーナーでは、様々なきつい質問が出されていました。やはり、パレスチナの高い教育水準をうかがわせるものでした。UNRWAの吉田美紀さんの準備と卓越したコーディネイトが充実した進行を可能にしていました。

しかし、このイベントの始まる前に「北海道パレスチナ医療奉仕団」からの挨拶をお願いされ、持参した世界地図で北海道・札幌の場所を示しながら『奉仕団』の目的とパレスチナへのエールを送ることができました。



南極・昭和基地との交流授業で「奉仕団」の紹介

一方、同行しているアラビア語の堪能な齊藤育さんが、その場でパレスチナの生徒たちに簡単な日本語を教えて、南極の森川先生に日本語での挨拶を送ることができました。

イスラエルにより「完全封鎖」されているガザの子供たちに外からの様々な情報や社会の存在を知らせることは、これからのパレスチナを担う若者たちの成長にも大切なことではないでしょうか。南極のみならず日本・北海道・札幌とガザ地区を結ぶ活動もいつかは実現したいものだと思いが揺さぶられました。

その後、小学校の近くを車で通りかかると数え切れないほどの生徒たちが、校門から湧き出るように下校するのに出会いました……本当に子供たちの多い国なのです、つまり未来に大きな可能性を秘めているのがパレスチナなのです。

3時過ぎになり、2014年のイスラエルから激しい侵攻をうけたベイトハヌーン難民キャンプへ……ここは、イスラエルとの境界が近く、空には巨大なバルーンが上げられ、イスラエルからの監視が執拗に行われている所なのです。

前回、前々回も訪問したイマンさんとそのご家族に会いに出かけました。

いまだに、破壊された家屋はそのままです。新しい家屋を建設中ですが時間がかかり、壁は今にも崩れそうな状態なのです。

郷土料理の自家製パン(それがまた美味しいパンなのです……)で歓待してくれました。札幌在住で「奉仕団」の支援者からイマンさんに託された文房具を届けることも実現することができました。



ベイトハヌーン難民キャンプでイマンさんと

イマンさんは、将来産婦人科の医師を目指しています。今は、大学への受験勉強の真っ最中とのことでした。ガザ地区の医学部を出た後、さらに日本で卒業研修を行いたい希望を語っていました。決して裕福ではない家庭で育っているイマンさんには、何らかの形で奨学金が必要ではないかとの提案が周囲の医師たちから出されていたのです。

さて、イマンさんと家族と交歓している間にとつぷりと日が暮れてしまいました。

イスラエルによる完全封鎖で燃料不足のガザ地区の夜は、文字通り真っ暗な「漆黒の夜」となります。地区内に通電されてもわずかであり、いくつかの施設や家庭で自家発電がおこなわれているだけなのです。ちょうど、停電で街灯のつかない暗い町を想像するとわかります。自動車のヘッドライトだけが異様に明るいのです。道路を歩いている人が突然現れてくる状態です。事故が起こらないのが不思議でなりません。

明日は、2か所の診療所で整形外科患者さんの診察です。

その後、妊婦さんの「腰痛予防」と運動療法について基礎資料を作るための妊婦さんへのインタビューが待っています、私達のメンバーで産婦人科医の西岡先生を頭に浮かべながらです……。

6日目 11月8日 (火)

～ガザ市内・リマール難民キャンプ診療所で診療開始 その後、虐殺の傷跡へ……～

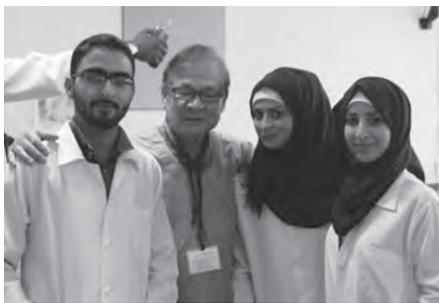
今日は、ガザ市内にある UNRWA・リマール診療所で整形外科関係の患者さんの診察です。

Jamil 院長に挨拶のあと、私達のために準備された会議室を診察室として診療を開始しました。

合計 17 人の患者さんです。全体に肥満を伴った変形性膝関節症、腰痛・肩こ

り・肩関節周囲炎、膝外傷などの患者さんがやってきました。看護師さんや理学療法士さんがアラビア語～英語の通訳を行ってくれました。特に、理学療法士のムタツサラマさんの通訳は抜群で、疾患内容の理解が素晴らしく大変順調に診療が続きました。彼は、昨年来の「腰痛体操」の集団指導の際にも大きな力を発揮してくれたのです。

今回は、実習に来ていたガザ地区内にある AL AZAR 大学医学部の 3 人の学生たちが、私達の診療の見学に訪れ、彼らの意欲的な質問への回答をしながら診察が行われました。



診察見学に来たアル・アザル大学医学部の学生

一方、私達が診察している間、齊藤育さんが「平和のポスター」作りのため、来院している子供たちとその親御さんから「鳩の形」の手形とメッセージを書いていただきました。それを「平和の鳩」として多くの鳩が未来へ向けて沢山飛立つ形で診療所の掲示板に「平和のポスター」として飾るものです。しかも札幌を立つ前に集会や個人、弁護士事務所などから託されたメッセージ入りの『日本



診療所の壁に展示された「平和ポスター」とジャミル院長

から来た平和の鳩』と『パレスチナの平和の鳩』と一緒に飛立つ姿が、明日完成して院内に姿を現します。

さて、午後からは 2014 年のイスラエルによる「ガザ侵攻」時に起きた大変残酷な出来事、海岸でサッカーをしていた 10 歳前後の少年 4 人がイスラエル空軍のロケット攻撃を受け虐殺されたご家族に会いに出かけました。

(詳細は、youtube のアドレスを記載しますので、是非ご覧ください。アラビア語のナレーションですが映像だけでも分かります。

https://youtu.be/a_dtmyx_svA)

殺された 4 人の少年の父親と家族たちは、異口同音に少年たちへの思いや無念さを語り始めました。時には涙を浮かべながら……思わず私の目頭も熱くなってくるのでした。

イスラエルの「侵攻」下でも、いつもと同じように住まいから 500m ～ 1,500m 先にあるガザの海岸でサッカーに興じていました。そこにイスラエル軍の戦闘機がロケット弾を 2 発撃ちこんだのです。近くにあったボートやカフェなどに逃げ込もうとしましたが即死の状態となりました。

そこは、私達の宿舎のすぐ近くで、今でも若者たちが時々遊んでいる「遊び場」海岸なのです。

イスラエルの凶暴さ、パレスチナ人の『皆殺し』を容認するジェノサイド(民族絶滅)政策が強化されているとはいえ、虐殺された少年たちとその家族の受けた被害と悲しみは、何物にも代えることはできません。

そして、幸い怪我だけです命が救われ生き残った少年の中には、未だ回復できない精神的ダメージを抱えていることもあるのです。

こうしたガザの一面に遭遇すると、一日も早くイスラエルの「占領政策」「入植地政策」「ガザの完全封鎖」そして「パレスチナ人の虐殺」をやめさせ、パレスチナとイスラエルが「対等な条件」のもと

での平和的交渉の実現が大切ではないかと思いました。

・・・暴力と憎しみの中からでは、「平和の構築」は困難なのですから・・・

7日目 11月9日 (水)

～ハンユニス難民キャンプ診療所、腰痛予防へ妊婦さんと懇談そして、ガザ地区南部クエート病院へ・・・

朝早く、「大音響」があり、「さて、侵攻か・・・」と思ってカメラを片手にベランダに飛び出しました。何もなし！！！！・・・港を見ると、夜間に漁をしていた小舟が続々と帰港している最中でした。

海上5Km前後以内でしか漁ができないガザの漁師たちは、ガザの中でも貧困に苦しく家庭が多くあります。

イスラエルによる封鎖前は、ガザの港からレバノン沖やエジプト沖にまで船を出していたのです。今は、漁業域が狭く限られ境界域では、ほぼ毎日イスラエル兵による漁師への拉致と発砲が行われているのです。(毎日、地元紙で報じられています)

リマール診療所では、2日目の診療日で、腰痛・膝痛、股関節痛の患者さんが12名受診。

ここにやってくる患者さんの中には、ガザ地区内の病院で手術を薦められた患者さんがセカンドオピニオンを求めることが少なくありません。日本と比較して劣悪な環境にあるガザ地区での「手術適応」は、いやがうえでも厳しくならざるを得ないのが実情なのです。

一方、今日の診療の傍らで、齊藤育さんが昨日から手掛けていた『平和のポスター』の展示が階段の踊り場の壁を用いて展示させていただきました。その前で、私達の様々な活動を支援してくれるJamil院長の笑顔が印象的でした。

こうした、最初は平和への小さな取り組みではありますが、その積み重ねがい

つかは花咲くことを願って展示の継続をお願いしました。日本・北海道とパレスチナ・ガザの小さなつながりの証としてです。また、ガザの子供たちが描いてくれた鳩とメッセージは、帰国後に講演会や写真展などでの活用を通して皆さんにお届けすることとしました。

その後、予約外に診察にやってくる患者さんを見た後で、本日の2番目の診療場所であるハンユニス難民キャンプ診療所へ国連のランドクルーザーをとばしてもらいました。

ところで、私達は、メンバーの産婦人科医・西岡先生を中心に妊産婦さんの腰痛予防のための「腰痛体操」DVDの作製を予定しています。

今回の支援活動では、まず現地ガザの妊婦さんの思いをインタビューから始めることになりました。今回は、ハンユニス診療所で、3人の妊婦さんに集ってもらい、年齢、妊娠月数、腰痛の有無と頻度、腰痛の既往歴と予防処置、妊娠前の運動歴、日常生活の制限と程度などを聴取しました。どの妊婦さんも腰痛の発症に注意し、それへの取り組みをしている事が分かりました。これを西岡先生にも持ち帰り今後の活動へ活かす事にしました。

ハンユニスを後にして、今回の最後の訪問先であるガザ地区南部の都市ラファ市内のクエート病院(民間病院)へ……

出迎えてくれた3名の医師と懇談し、「腰痛体操」のDVDを寄贈してきました。ここでも医療機器が古いにもかかわらず財政難のため更新ができないといった窮状を訴えていました。そうした中で、この若い医師たちは懸命に地域住民の健康維持にかかわっていました。

さて、本日の最後の行動は、パレスチナとエジプトの国境であるラファ検問所へ行くことでした。

現在ここは、人の出入りは基本的になし、物の出入りも1週間から1ヶ月に数回・2時間程度とのことでした。ここで



ガザ・エジプト国境にあるラファ検問所

も「99%の閉鎖状態」が続けられているのです。

イスラエルによる「人と物流の封鎖」により「天井の無い牢獄」と化しているパレスチナ・ガザ地区にいて、その解放の日を一日も早く実現しなければならぬという「使命感」の様なものが私の胸の中に沸々と湧いてくるのを感じながら国連車の進路をガザ市内へ向けたのでした。

夕方、宿舎に二人の若い女性の訪問を受けました。

1昨日の昼食時にレストランで卒倒したアマニーさんと彼女のお友達でした。

その場で呼吸管理をした後意識が戻り、本人と家族の希望で帰宅した方でした。



訪問を受けたアマニーさん(左)と友人(右)

その後の赤新月社病院での診断は、「低血糖」とのこと。聞けば、とある原因(自主的断食)で3ヶ日間、ほとんど食事をとらずにいたとのことでした。すっかり元気を回復した様子を見せたいと私を訪ねてきたのです。

最後のお別れに、私が「来年、またガザでお会いしましょう」というと、彼女は「来年も生きていれば・・・」と優しい笑顔で話していました。

これも、「いつイスラエルからの侵攻があるかわからない」、そして「いつ死

ぬ＝殺されるかもわからない」というガザの住民の生命と暮らしを取り巻く厳しい現実を見せられたようでした。

来年のガザ行では、必ず元気な姿を見せてくれることを願ってお別れしました。

8日目 11月10日(木)

～「ガザ地区」最終日 次回の「子供支援」とスポーツ交流実現の準備へ～

まず、昨日の別記のその後です……前日のアマニーさんから朝食を招待するメールが入ったのですが、すでに行動予定が決められているので、次回にお世話になることをお願いしました。

本日で、今回のガザ地区での支援を終わり、ガザ北部にあるガザ～イスラエル国境＝Erez Crossing Point（検問所）を通過してヨルダン川西岸・エルサレムへと活動の場面を移します。

私たちは、昨年の「第6次医療支援活動」から取り組みを広げて「子供の支援」(save the children)を開始してきました。今回も齊藤育さんを中心に、リマール診療所で「平和のポスター」展示を行いました。これは、ガザと北海道・札幌の子供同士が平和を象徴する『鳩の手形』を通して平和の言葉と気持ちを交流し、両国における平和の構築と発展に繋げるものです。



「平和のポスター」に取り組む齊藤育さん

今回は、その取り組みをさらに確かなものにするため、現地との関係づくりも重要な課題でした。ガザ「出国」前に、11月7日の「ガザ～南極交流授業」で知りあったラディ女史に会うためUNRWAの

現地代表部を訪問しました。歓迎を受けた後、「子供の支援交流活動」の実現に向けて話し合い、合意することができました。

ガザの子供の置かれた状況は、大変厳しいことは想像できますが、その実態を十分把握できないでいました。イスラエルによる「完全封鎖」と定期的に続く「イスラエルの侵攻」は、「戦争しか知らない子供たち」を増加させ、ガザ地区内での「格差と貧困」の進行、水をはじめとする「環境汚染」などをもたらし、ガザの子供たちは、身体的・社会心理的追い詰められている現状が語られました。

私達が、提案した「絵画・音楽・芸術などを通じた両地域の子供の教育・文化交流」の趣旨が受け入れられ、今後その方法を検討することにしました。

もうひとつの提案は、バレーボールなどによる「スポーツ交流」です。「奉仕団」に参加予定の札幌の中学女子バレーの監督が、ガザ地区のバレーボールコーチに指導方法を伝えるのか、直接ガザの子供たちに技術を指導するかなど、今後の検討課題といたしました。

スポーツは、互いに尊重し公平なルールの下に種目を競いあうものです。その公正さを尊重するスポーツ活動を通して、「ガザ完全封鎖」、弾圧・虐殺などの「イスラエルの不正義」を乗り越えるため、心身共に強く健康なガザの子供たちの成長への手助けが少しでもできればと考えているのです。ラディ女史が私達の提案を受け入れてくれたものの、帰国後の課題として十分に検討することとしました。

その後、Erez Crossing Point（エレツ検問所）へ向けて、国連車・ランドクルザーを走らせました。

検問所は、すいていて……というより、「封鎖」により出入りがほとんどない状態なのです。ガザの住民の無権利状態と辛さ、悲しさ、それに対峙するイスラエルの不正義を心に刻みながら、1.5Kmも続く「金網回廊」を重いスツ

ケースを押して歩くのです。

その後は、ガザを「出国」～イスラエルへの「入国」という形をとるため、世界一厳しいセキュリティと言われている「審査」を強いられることになるのでした。その中で、札幌から持参したお土産のキャラメルが廃棄されたり、ガザで購入したオリーブオイルが荷物検査で紛失＝盗難されたり……およそ、通常は考えられない「異常事態」が当たり前のように行われているのです。

こうして、自動小銃で武装した民兵が見守る中、やっとイスラエルへの「入国」が認められるのです。イスラエルの「不当行為」に抗議するなどという民主主義社会では、当たり前のことが、ここでは全く通用しないことも良く分かりました。

そして、検問所の外に出て青く晴れ渡る空を見上げると、イスラエルが設置している高性能カメラを完備した大きなバルーンが私達を上から監視しているのでした。どこにいてもイスラエルの管理・監視から逃れることができない仕組みになっているのでしょうか……。ちなみに、「イスラエルのセキュリティ企業は世界一」ともいわれ、日本の原発のセキュリティは、イスラエル製となっているのです。

さて、いよいよ明日は、毎週金曜日にイスラエルの占領に反対する国際的平和デモが行われているピリン村行です。以前、イスラエル兵に撃たれて障害を負っている「車いすのラニー」さんに褥創を治す医療材料を持参することになっているのです。

9日目 11月11日(金)

～毎週金曜日「国際平和行進」が続くピリン村……報道映像写真家・ハイサム宅へ、「車いすのラニー」へ医療材料を届ける～

今日は、毎週金曜日の午後、「イスラエルの占領反対」「パレスチナに自由

を！！」などを掲げて「国際平和デモ行進」が行われているビリン村へ・・・そこで、そのデモに参加し、地元の人々とともに国際交流を図ることなのです。

9時に宿舎を出発し、ゲバラのマークのある雑貨屋さんで、水をゲット・・・その後、パレスチナ自治政府のあるラマラで公共バスを乗り換え、その後はタクシーでビリン村へ・・・。

さて、最初に訪問するのは、国際的報道映像写真家の Haitham (ハイサム) のところ。ここでは、最近のビリン村の様子について情報交換を済ませます。最近、イスラエル軍によるビリン村内部への「侵入」の頻度が多く、先週は夜間に急襲され13歳の子供が逮捕＝拉致されていたとのことでした。

そのうちに、カナダ生まれで、現在米国カリフォルニアに住む若い女性に加わり、賑やかなちょっとした「国際交流」になって行きました。彼女の口からはトランプアメリカ新大統領への批判が出されていました。



ビリン村ハイサム氏宅で

さあ、金曜日のイスラムの礼拝が終わり、「国際平和デモ」開始の時間です。私達3人と若いアメリカ人女性、ハイサムさんの5人で、デモに出かけました。

この日の「行進」の参加者は20～30名(先週は100名超えとのことでした)。けが人の発生備えて、赤新月社の救急車がスタンバイする中で、地元の活動家を先頭に「行進」は開始されました。

今日の行進は以前と異なり、分離壁のすぐそば、入植地への出入り口まで進んで行くのです。分離壁の監視塔からは、イスラエル兵がデモ隊の様子をじっと監視しています。

シュプレヒコールとともにパレスチナ国旗が振られる中、分離壁の門が開かれ重装備したイスラエル兵が10数人出てきて、デモ参加者に尋問したり銃を向けで威嚇するのです。



ビリン村で「車いすのラニー」と齊藤育さん

今回の比較的穏やかな「国際平和デモ」の最中に、映画「車いすのラニーと」の主役として知られるラーさんに会うことができました。ラニーさんは、以前イスラエル兵に頭と頸椎・胸椎を撃たれ下半身麻痺、上肢の不全麻痺の状態となっています。今年になってから臀部に褥瘡を発生したため、私達は、その治療のために日本から良質の「湿潤治療材料」を持参して来たのです。来年の再会を約束してラニー宅を後にしました。



ビリン村分離壁前での抗議行動

その後、ハイサム宅で昼食をいただき、奥様が作るハンドメイドの作品を購入しました。イスラエルの占領が続く中で、特に女性の地位は極端に低下しています。自覚的な女性たちは、ハンドメイド作品などを作製・販売しながら生計のたしにしているのが現実です。しかし、いつかは来る「女性の自立」を目指して、実に地道に実績を積み重ねていました。そして、ここでも来年の再会を約束して、若いアメリカ人女性とともにビリン村を後にしました。

これから向かうカランディア検問所へ向かう途中、ここにもイスラエルによる巨大バルーンが上空からパレスチナ人の生活・行動を監視しているのでした。

カランディア検問所は、パレスチナ自治政府の首都・ラマラとエルサレムの間であり、帰り路＝エルサレム方面に行く時には、厳重な検問が待っています。人的なチェックはもとより自動車での通過にも厳しい制限があるので、ここはいつも車が渋滞状態なのです。

こんなに厳しく制限のあるカランディア地区は、パレスチナ人の抗議行動の盛んなところである事は、ここを通るたびに実感するのでした。

10日目 11月12日(土)

～シュファット難民キャンプ診療所で「平和のポスター」展示、そして「スポーツ交流活動」(バレーボール)の準備に～

今日で、同行して大活躍している齊藤育さんが一足早く帰国する日となりました。

午前中は、バスターミナルで207番の公共バスに乗り、明日から診療活動を予定しているシュファット難民キャンプへ出かけました。

キャンプへ入る時の検問はなく、昨年ほどの緊張はありません。(しかし、帰り路＝キャンプから出てエルサレムに向かうときは・・・後でふれることにします)

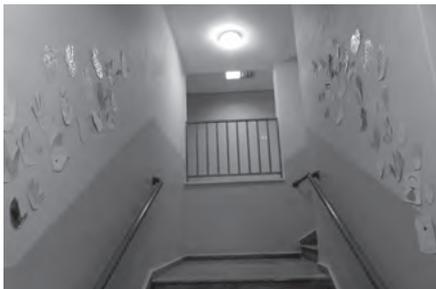
キャンプ内には、今年6月1日に開院した真新しい診療所が完成していました。



新装なったシュファット難民キャンプ診療所

広々とした、ゆっくりな作りの中で診療が行われていました。毎年やってくる私達と顔見知りです・・・どこからもWell come back（お帰りなさい）の声がかかるのです。

早速、齊藤育さんが待合にいる子供たちを集めて「平和のポスター」作りが始まりました。そこでは、親御さんも参加し「小さな平和交流」が行われているのです。その後、出来上がった「平和の手形」を階段の壁に沿って平和に向かって飛び立つ鳩達の群れが描かれています。



階段に展示された「平和のポスター」

一方、来年から予定しているシュファット難民キャンプと日本の子供たちとの「スポーツ交流」の準備もありました。難民キャンプ内の「Youth Center」を訪問し、「スポーツ交流」の目的と趣旨を説明し、その事務局を中心に、可能かどうかお話し合いが持たれました。私達は、バレーボールを通しての「スポーツ交流」を検討しています。

バレーボールは、互いがコートで分けられ、直接コンタクトすることがない「平和的なスポーツ」であること、また何よりも「チームワーク」が要求されるものであることが事務局から提起されました。現在は、チームがなく専任監督も不在な状態です。しかし、双方の交流が多面的にするためにも今後直接連絡を取り合いながら、来年「支援活動」では、必ずその第一歩を創りたいと考えているのです。

さて、シュファット難民キャンプからエルサレムに向かう時（つまり、エルサレムに入る時）の検問は、入植者とイスラエル兵の二人がひと組となって、すべて

の公共バスを検問します。13歳以下と60歳以上のパレスチナ人と我々外国人をのぞいたすべての男女が、一度バスを降ろされ、ひとりひとりチェックして通行を許可するのです。

バスの中に残された我々には、自動小銃をぶら下げた二人がひとりひとりのIDをチェックするのです。全くの不当行為ですが・・・写真撮影ができないのも残念でなりません！！こうして、イスラエルの占領と軍事支配の「容認」と「既成事実作り」が着々と進められているのです。

昼食方々、齊藤さんとともにエルサレム旧市街で「定点観測」を行いました。場所は、旧市街の「繁華街」であるオーストリア・ホスピス前のT字路です（その昔、キリストが十字架を背負わされて歩かされた道路です）。今日は、日中30度を超える暑さの中、住民を監視するイスラエル兵は、涼を求めて日陰で歩哨していました。



監視活動中のイスラエル兵

そこを終えて、宿舎への帰り道、旧市街で人の出入りのもっとも多い「ダマスカス門」で、イスラエル兵と入植者による地元パレスチナ青年に対する「尋問」が行われているではありませんか。一見、賑やかで「何もない」様なエルサレムの街でも一皮むけば、イスラエルによるパレスチナ人への弾圧が陰に陽に、執拗に行われている実態に会うのです。全く不当な「尋問」を受けた側に立って想像力を働かせることが「平和？」な日本に住む私達に問われる「最低限の義務」ではないかと思えてなりません。

午後5時、本日夜行便で帰国する齊藤育さんを宿舎の前でお見送り・・・若さがはち切れ、誠実で人間性豊かな育さんの活動が走馬灯のように頭の中を駆け巡っていたのです。そして、これからの活動にさらにさらに大きな力を発揮できるように・・・その条件作りが私達に与えられた素晴らしい課題であることを心の中で反芻していました。

その後、シュファット難民キャンプ診療所所長・サリム先生宅で、アラブ料理の夕食をいただきました。日本人の口に合わせたのかもしれませんが、食後のコーヒーも日本的かと感じ、そのお心づかいに感謝でした。

ご一緒したのがサリム先生の次男モハンマドさんです。彼は、昨年キューバ・ハバナの医学部を卒業し、総合医としての研修をエルサレムで行っているのです。精悍な顔立ちは、キューバ革命に寄与した医師、チェ・ゲバラを思わせる雰囲気です。キューバの医学と医療、その制度と内容、医学部の卒業研修、キューバ経済、アメリカとの関係、トランプ新米大統領、日本文化、そして私も大好きな野球論議などなど・・・話が尽きませんでした。



10月に来札が予定しているモハンマド医師

明日のシュファット難民キャンプの診療には、エルサレム在住の医師・服部美

貴先生が同行していただけることになりました。すごくうれしいのです！！！！

11日目 11月13日(日)

～いよいよ Shufat 難民キャンプ診療所での診療開始 現地、エルサレム在住の服部先生が合流・・・～

これから11月17日まで、私達のヨルダン川西岸での主な活動拠点であるシュファット難民キャンプ診療所での診療活動が行われます。本日の診療には、現地に在住する服部美貴先生が参加していただけることになり、大変な励ましを受けています。

午前7:30、エルサレムのバスターミナルから白山さんと3人でシュファット難民キャンプへ向かいました。本日、診療所は休み・・・そのかわりすじ向いにあるアルクッツ・チャリタブルセンター（福祉センター）での無料検診となりました。このセンターは、サリム先生が1993年に難民キャンプに住む人々と一緒に、様々な団体からの寄付で設立されたものなのです。ここでは、難民はもとよりそれ以外の貧しいパレスチナ人やベドウィンの人々がやってくるのです。

受診した患者さんは、総計23名、そのほとんどが腰痛と膝痛であることは昨年と同じでした。アラビア語～英語の通訳を兼ねて私達を助けてくれたのは、理学療法士のラビベさんでした。



服部先生とラビベ理学療法士

また、一緒に診療活動してくれた服部先生は、私の診療を数人見学した後、神経学を含めて適切な診断を下してくれま

した。患者を前にした時の大変優しい表情と対応は、初対面の医師に対して患者さんの心を開かせるのに十分すぎるほどの素養を感じさせるものでした。特に、女性の患者さんにとっては、遠慮なく身と心を委ねることができたものと思われました。

患者さんの中には、昨年も受診された方が再診することがあります。昨年〇脚（内反膝）で受診し、その時に札幌から持参した外側楔状足底板を処方した患者さんも見えました。

診療中に突然やってきたのが、EAPPIというスイス・ジュネーブに本部があり、パレスチナにおける「監視団体」のメンバーです。みんな若く生き生きしており「日本の若い人が参加してほしいものですね・・・」という白山さんの言葉が印象的でした。



パレスチナで監視活動をつづけるEAPPIの若いメンバー

診療の合間をぬって、同じセンター内にある幼稚園を見学しました。ここは、昨年12月にイスラエル兵がシュファット難民キャンプへ侵攻してきた時、9時間も居座り、外庭の壁に銃弾が撃ち込まれた幼稚園でした。2～4歳児の教室に招かれ、幼稚園の先生方も元気であったことに胸をなでおろしたのです。

さあ、明日はシュファット難民キャンプの診療所での診療です・・・。

12日目 11月14日(月)

～服部先生からおにぎりの差し入れが・・・シュファット難民キャンプの検問体制～

昨日に続き現地の服部先生が今日も診

療に参加・・・しかもすごく可愛いお嬢さんを連れてなのです。先生が診察中は、診察室や待合スペースで遊んでいたのです。一度もぐずったり寂しがったりせず、白山さんがその後を追いかけて「安全確保」をしていました。

診療は、サリム先生が診ている生活習慣病に患者さんの中から予約されて受診するようになっています。ここでもやはり腰痛・膝痛・肩こり・肩周囲炎などの患者さんが中心です。診療所の職員の人たちやその家族も受診を待っていました。特に、腰痛患者さんには私達が作製して持参した「腰痛体操」のDVDを活用してもらっています。ここ数年の経過でどれだけ普及しその効果が発揮されるのか楽しみです。

ここでも服部先生が女性患者さんを診る優位性を感じるのです。医療現場での第一歩は、患者さんとどれだけ信頼感を共有できるかが大切なのですから・・・。

一方、シュファット難民キャンプ内には、診療所の向かいに"YOUTH ACTIVITIES CENTER"があります。キャンプ内の若者達が、スポーツを通して健全な心身を作り上げる努力がなされているのだらうと思います。来年度には、私達が計画している「スポーツ交流」の拠点になるかもしれません。後日、詳細な見学を計画したいと考えています。



シュファット難民キャンプ内の Youth Activites Center

昨日と今日は、服部先生から“おにぎり”の差し入れがありました。これまで、アラブ料理を中心に食事をしていたのですが、やはり日本食、なかでも“おに

ぎり”は、私にとって大変な御馳走でした。私、私の子供、私の孫と代々我が家に受け継がれている“おにぎりの味”は、底知れないエネルギーをもたらしてくれるのです。その“おにぎり”がエルサレムでいただけのですから、心身共に最高の「元気の補給」となりました。服部先生に心から感謝しながら食したのです。

さて、シュファット難民キャンプの出入りは、今日も「厳重」な検問体制です。相変わらず、入植者とイスラエル兵が二人ひと組で若いパレスチナ人を中心に「尋問」を行っていました。私達は、検問所を通過する公共バスの中でパスポートのチェックを受けるだけなのですが、せめてもの「抵抗の意」として私はサングラスをかけたままで過ごしました。

医療活動を「第一の任務」としている私達が直接イスラエル軍の標的になる可能性は極低いのですが、何かの『事態』に巻き込まれることは否定できません。万が一に備えて、細心の注意を払って活動を続けているのです。地元の人々と触れ合う中で、お互いの信頼関係を深めて行くことが「活動の安全」を確保するための大切な柱にしています。

13日目 11月15日(火)

～金曜日の「安息日」・・・歴史の街、ヤーフアへ・・・～

本日は、『パレスチナ独立記念日』なので国民的な休日となりました。

イスラエルの占領に苦しめられていたパレスチナ人たちが、1988年11月15日に独立宣言を発したのがこの日なのです。

従って診療所もお休み、私達も心身の疲れをいやすために「休息」か・・・と思いきや・・・サリム先生から、テル

アビブに隣接しているヤーフア (JAFFA) への小旅行を誘われました。

ヤーフアと言えば、パレスチナ地方で最も古くから栄えた港町なのです。およそ4000年前に開かれたこの街には、このあたりの文化や人々の暮らしを理解する上で貴重な体験が待っているようでした。同行してくれたのは、奥様と次男のモハンマド医師です。

やはり、そこは古い町ですが海岸から見えるイスラエルの最大都市で、高層ビルが建設中のテルアビブが海岸沿いに見えます。が・・・ごく西欧風な感じを人工的に演出しているイスラエルが、その裏の顔でパレスチナ人への「弾圧と殺戮」を繰り返しているのですから、氣候がいいなどと能天気な気分だけではいられないのでした。



「ノミの市」でゲームに興じる住民

旧市街を歩いていると、以前はパレスチナ人が作り住んでいた古い石造りの建物もイスラエル側の買収・接収が続き、今では、イスラエル人が住むことになっているのです。

この地での「蚤の市」も有名です。サリム先生とともに散策していましたが・・・同行した白山さんが「記念品」を買い求めていました。その対側では、囲碁ともチェスでもない様なゲームを楽しんだり、中古の自転車を売り込む姿があり、それを見ているだけでもここに集う庶民の様子的一端を覗うことができたのです。

こうするうちに30度を超えていた気温も下がり、地中海からの涼しい風が歩き疲れた体に心地さをもたらしてくれたのです。

帰りもサリム先生の運転で・・・フリーウェイをエルサレムに向かって車を

走らせました。私達がイスラエルへの出入りに利用しているベングリオン空港の管制塔を左側に見て行くとイスラエル刑務所が現れました。ここには、イスラエルの占領に反対する人々が数多く逮捕・拘束されているのです。もちろんその中には投石しただけの少年たちも含まれていることを思うと胸が痛みました。



多くのパレスチナ人が不当に拘留されているイスラエル刑務所

次に来たのが、イスラエル兵が立つ「検問所」。前を走る車が止められIDが確認されているのを見たので、私も即座にパスポートの提示を準備しましたが、必要ありませんでした。

さらに、エルサレムに近づくともフリーウェイの両側は、見事な新しい分離壁が築かれているのです。ということは、ここでも国際法違反の『入植地』が拡張されパレスチナ人の土地が強制的に奪われていることは想像に難くありません。



入植地に新しく建設がつづく分離壁

そして、ここでもイスラエルは大型監視バルーンを上げ、空からパレスチナ人とその社会の監視をつづけているのです。

自分の国の中を移動するのに「検問所」の通過を強制され、空からは巨大バルーンで監視される・・・そして、抵抗すれば簡単に殺戮される・・・こうした「人の権利」を破壊するイスラエルの政治政策・・・許す事ができません。

近いうちに、「奉仕団」でも弁護士さんの参加をえて一緒にパレスチナに来ていただき、この人権破壊の実態を告発し、解決する取り組みを開始したいと思っています。

14 日目

11月16日(水)

～旧市街でのイスラエル兵による「尋問」とパレスチナ人の抗議～

本日もシュファット難民キャンプでの診療が続きます。

難民キャンプへは、公共バスで向かいますが、今も厳重な検問体制が作られています。

今日は 21 名の患者さんが、腰痛・膝痛などを訴えて診療所の 2 階に陣取った診察室に来てくれました。英語～アラビア語の通訳は、看護師さんを中心に時々隣の部屋で診療している歯科医の先生が手伝ってくれるのです。まさに診療所あげての私達への「応援」なので頭が下がります。

振り返れば、サリム先生の紹介でここで診療を始めてから今年で 4 年目になるのです。ちなみに私の Face Book のカバーは、診療所のスタッフと一緒に撮った写真を使っています。

診療中に、UNRWA・西岸事務所の事業計画副責任者のメグさんの訪問を受けました。大変明るい女性で、私達に感謝を述べながら、清田明宏先生の話が中心の話題になり再会を約束して帰られました。

診療の終わりごろ、診療所の玄関に脳梗塞による左片麻痺と糖尿病による左下肢壊死後の大腿部切断、右下肢感染性潰瘍と壊死を合併した男性患者さんがやってきました。

電動車イス的な乗り物を自分で運転して移動動作をしていました。

難民キャンプ内はもとよりアラブ社会の問題としてある糖尿病・高血圧の原因でもあり結果でもある「肥満」……

私達の医療課題として挙げている運動療法の普及とともに、減量のための「栄養管理」についても活動の分野を広げる必要性を強く感じています。今回の活動を終えて帰国後にその分野の専門家と相談を開始することしました。

診療後、下校時とも重なり、キャンプ内の女子中学生と御挨拶を交わしながら、渋滞の中を時間をかけてエルサレム旧市街地へたどり着きました。

その後は、遅い昼食をとりながら、いつもの旧市街「定点観測」です。

人通りの多い、有名なダマスカ門の前にいつものと同じく 6～7 人のイスラエル兵が自動小銃を構えて道行くパレスチナ市民を監視していました。



エルサレム旧市街地・ダマスカ門で
検問するイスラエル兵

そこに、ひとりのパレスチナ中年男性がイスラエルへ向かって大声で、何かの抗議をしていました。成り行きからみると同行していたパレスチナ女性とともに「何らかの屈辱」を受けたのではないかと思われました。男性の抗議の勢いは止まることはなく、その迫力に押されて、自動小銃を持っているイスラエル兵は、不動の姿勢で立ちつくさざるを得ない状況でした。

きっと、誰が見てもイスラエルの「不正義」「理不尽」な行動が続く中で、中年男性の「正当な抗議」に弾圧を加えることができなかつたのではないのでしょうか。

15 日目

11月17日(木)

～北海道とシュファット難民キャンプの『医療技術交流活動』提案……イスラエル軍基地からハラメントを受けているベドウィン集落へ

今日で、シュファット難民キャンプでの診療活動は最終日となりました。

腰痛・膝痛・肩こりなどを中心に、診療と運動療法の指導を行いました。運動の方法は、白山さんが優しい笑顔で丁寧の説明してくれました。また、腰椎手術へのセカンドオピニオンを求めて受診したりもしました。

しかし、居住地が遠すぎて受診を断念せざるを得なかった人、診療所職員の家族や親せきなども受診の困難な人々には次回の診療を約束して、日程を終了したのでした。

その後、サリム先生をはじめ職員たちが私のいた診察室に集まり、感謝と労いの言葉を交わしました。そこで、出されたお話しは、彼らの来日希望と『医療技術者の相互交流』についてです。

医師のみならず、この診療所では、多くの職員が働いています。

診療所側からは彼らの技術研修と視察を兼ねて、私達からはパレスチナの実情を学び、技術貢献を目的に『交流活動』に発展させる夢のある話を語り合ったのです。

診療所の「生活習慣病」（こちらでは、Non Communicable Disease = NCD）を担当している看護師のアフメドさん、薬剤師のムラドさん若い職員たちの目が輝いていたのでした。こうした『医療交流活動』もこれからの課題として帰国後、「奉仕団」の仲間や病院とも相談しなければなりません。

診療活動終了後、シュファット難民キャンプに別れを告げ、サリム先生の運転する車でベドウィンの人々の無料検診で出かけました。

中東・北アフリカに住む砂漠の遊牧民であるベドウインの多くは、「難民」としては認定されず、医療・教育・労働などすべてで劣悪な状況におかれています。特に、パレスチナのベドウインは、イスラエルによる「入植地」建設で遊牧地域が分断され、その人権と生活基盤の破壊が著しく進行しているのです。

さて行き先は、フェイダート地区にあるベドウイン集落です。ここには5家族で約200人のベドウインが暮らしています。しかし、この地区はイスラエルが建設した分離壁のみならず、イスラエルの軍事基地が彼らの住宅の庭にまで接しているのです。つまり、この集落は、分離壁と軍事基地に取り囲まれた状態です。



フェイダート地区のベドウイン集落とイスラエル軍事基地

遠くに見える分離壁にある監視塔から見ているイスラエル兵の動く姿が、CANONの300mmの望遠レンズが捕らえました・・・こちらが監視すれば、イスラエルも監視している・・・安全第一、挑発禁止がモットーの活動なので、その場面を連写後カメラを即座に下ろしたのです。



ベドウイン集落を監視するイスラエル兵

ここの日常生活では、庭で飼っている貴重な鶏には毒物が投げ込まれるのという嫌がらせのほか、軍事基地の金網には電流が流され、触ると感電しイスラエル兵に射殺されるという状況です。

イスラエル軍は、「ベドウインを一人射殺しても1シェケル（イスラエルのお金の単位で、約30円）の値しかないのだ」と、人の生命を動物以下におくユダヤ原理主義思考を露骨に「実践」してくるのです。

なんと・・・人の命が・・・30円！？私達には、即座に信じられません！！

私は、その金網の直前まで進み現場の状況の厳しさを体験し、イスラエル軍の非人道的な蛮行に怒りが湧いてくるのです。

しかし、彼らは「ここは、HOME LAND、FAMILY LAND」（我々家族の土地だ！！）とって譲りません。

ここのベドウインの人々は、イスラエルの進める不当な囲い込みと「圧迫」に抗して、わずかな土地でオリーブとハーブの生産販売で生計を立ており、貧しい経済状態に追い込まれています。その状況下で、イスラエルは「甘い条件」を出してこの土地からの転居・移転の誘いをかけてくるそうです。（なんだか、日本でいえば沖縄の米軍基地や原発の建設を強行したり、アメを差し出す権力のやり方と同じ構造ではありませんか！！）

恐怖と貧しさを強いられている、ここのベドウインの人々にも「支援」が必要です。

その一環としてサリム先生がボランティアとして無料検診を行い、私達は、そのお手伝いをしたのです。患者さんを診察後、札幌から持参した薬や軟膏を差し上げました。聴取した結果、やはりお金を払って病院へ行くのは経済的に大変困難なのがベドウインであることを再確認したのでした。

「殉死」したパレスチナ青年とアラファト氏の共同モニュメントを見ながら宿舎への帰り道を急ぎ、一日の行動を終了したのです。

サリム先生が私達に「今日の一日はどうでしたか？」との問いにい・・・

私は、大きくはつきりした口調で「Today is very interesting and exiting

day!!!!」と・・・。

16日目 11月18日(金)

～金曜日の「安息日」・・・支援者へお礼の絵葉書を郵送・・・～

金曜日の今日は、イスラム社会では「安息日」となっています。

お昼に行われる礼拝には、ほとんどのイスラム教徒の人々はモスクへ礼拝に出かけます。従って、午前中、お店のシャッターが下ろされ商店街は閑散としているのです。

しかし、限られた日程で行動している私達にとっては、貴重な活動時間の確保となるのでした。

まず、今回の「第8次医療・子供支援活動」にあたり、多くの方々から多大なご支援をいただきました。北海道を中心とした小さな「任意の民間団体」である『北海道パレスチナ医療奉仕団』の活動は、多くの支援者に支えられて来ました。

今日は、そうした支援者の方ひとりひとりに、支援への感謝と現地の状況、私達の活動内容を書き添えた絵葉書を日本へ発送するため、東エルサレムの郵便局に出向き、一枚一枚切手を張って郵送作業を行いました。

こうした、地道で小さく細かな、そして誠実に行う支援者の皆さんへの「現地からの返礼活動」は、現地で活動している私達を「活動の原点」に発ち返させてくれる大切な取り組みなのです。

ここの郵便局職員も親切で、特に200枚近くの絵葉書を日本に郵送するので、職員も力が入ったのかもそれません・・・シュ克蘭（アラビア語で「ありがとう」の意）とって郵便局を後にしました。

（ちなみに、以前、西エルサレムの郵便局で郵送作業を行った時には、郵便局に入る際、手荷物を金属探知機で検査を受けなければなりませんでした。）



金曜日アルアクサモスクの礼拝に向かうパレスチナ人

そうしているうちに、イスラム教の礼拝の時間が近づいてきました。旧市街に入ると、アルアクサモスク（岩のドーム）に向かって数万人のイスラム教の人々の列で狭い路地が溢れてしまいます。もちろん、私達は、イスラム教徒でないのに中に入ることはできず、行けるところまで・・・と思いましたが・・・無理でした。入りきれないイスラム教徒は、外で礼拝するしかありませんでした。

さらに旧市街の「ライオン門」という所まで足をのびしました。この日は、イスラムの休息日の金曜日で人出の多いこともあってか、ここでもイスラエル兵の厳しい監視活動が続いていました。「ライオン門」の外で立ち止まって、その状況を見ているとパレスチナ人の運転する乗用車がイスラエル兵に止められ、「身分証」を取り上げられて、「尋問」のため駐車場へ連れて行かれました。イスラエル兵の監視は、屋上からも続けられていました。

12:00 過ぎ、礼拝が終わると今度は大勢の人の流れが逆になり、その流れに沿って旧市街を移動しました。

ところが、私達が「定点観測」するオーストリア・ホスピス前のT字路についたところ、すでにビニール袋を手にしたひとりのパレスチナ人への「尋問」が行われていました。通りは、ごった返す人でいっぱいな時なのにです。思わず、カメラのファインダー越しに見ると何かの障害者の方のようにも見えました。10分間ぐらいの「尋問」で「釈放」なのですが……

こんなことが日常なのです……。

帰路のため、さらに人ごみの中を「ダマスカス門」へ向かっていると……

今度は、二人のパレスチナ青年が路地の中で「尋問」されているのに出くわしたのです。ただちに望遠レンズを通してその詳細を記録しました。それぞれがIDカードを提示させられながらリュックの中に手を突っ込まれての「尋問」なのです。



パレスチナ青年へ「尋問」をつづけるイスラエル兵

こうした「尋問」が、監視するイスラエル兵のその時の気分で行われているのです。「尋問」されたパレスチナ人にとっては、ただ普通に日常生活をしているだけなのに……

イスラエルの軍支配と弾圧は、パレスチナ人の人権と「自尊心」をことごとく破壊することから始まります。日常的に、パレスチナ人に「屈辱」を与え、イスラエルに膝まづくパレスチナ人にさせようとするイスラエルの意図は明確です。

しかし、イスラエルの「支配と弾圧」の下で、パレスチナ人の抵抗のエネル

ギーは、沸々と蓄えられているのではないかという思いを強く感じたのでした。

……これだけの「弾圧」の中でも、パレスチナ人の明るさとエネルギーな行動がある限り……必ず、パレスチナに自由がやってくる……その時には、彼らと一緒に肩を組んで嬉し涙を流したい……そう思いながら深い眠りに引き込まれてゆきました。

17日目 11月19日(土)

～イスラエル軍・「入植者」との闘いが続く歴史の街ヘブロンへ……～

今日は、イスラエル軍・「入植者」による不当な弾圧とそれに対する厳しい闘いが続くヘブロンへ……活動家のイツサ・アムロ氏を訪ねて、彼を診療し持参した薬を渡す事、同時にヘブロン「状況」を監視、報告するのが目的でした。

朝10時、私達と Galliko MIEKO さん、NPO 法人「パレスチナ子供のキャンペーン」現地事業担当の原文次郎さんの4人で、ヘブロンに向かいました。

途中、ベツレヘム周囲でも異様で巨大な分離壁が迫ってきます。また、焼かれたオリーブ畑も散見されます。私達にすれば、丹精込めて育ててきた水田の稲がある時焼き払われるようなことが頭の中に浮かびました。

ヘブロンは、パレスチナ自治区南部の歴史ある人口40万人の中心都市です。今日は、土曜日とのことで中心街や旧市街には人があふれ、狭い路地や歩道を人とぶつかり合いながら“Sorry”を連発しながら前に進まざるをえませんでした。旧市街に入ると、イスラエルの占領実態が迫ってきます。建物の屋上からは、イスラエル兵がマシンガンを抱えて、私達を見下ろして「監視」しています。

ここでも上空を見上げると、建物の上階を占領している「入植者」が下の通りに向かって不要物を投げつける……それから自らを守るために通りの家には金網



パレスチナ人が金網で生活を守る
ヘブロン市旧市街

が張られているのです。

旧市街を抜けて、「シュハダ通り」への検問所へ・・・あの、「牢屋の回転扉」が待っています。子供達も列を組んで、ひとりひとりそこを通らなければなりません。イスラエルは、パレスチナ人に対して、小さいころから「パレスチナの軍事占領状態」を脳裏に焼き付ける（一種の洗脳）事を目指しているのです。

シュハダ通りとは、本来ヘブロンの代表的な繁華街でしたがイスラエル軍によりすべての商店が閉鎖に追いやられ、まさに「作られたゴーストタウン」なのです。

通りの入り口、出口、通りの中でもイスラエル兵が不当な入植者を「守る」ために、威嚇・「尋問」を繰り返します。

今日は、国際的ないくつかのグループがこの実態を視察するためにやってきていました。中には、イタリアから来たという若者3人に会い、その優しい笑顔



ヘブロン・無人化させられたシュハダ通りで
監視活動を続ける欧州グループ

と輝く眼差しがパレスチナ人への思いやりを感じました。

ここ、ヘブロンには、「イスラエル兵と入植者の横暴とパレスチナ人への攻撃」を監視する団体が常駐し、このシュハダ通りを中心に監視パトロールを続けています。こうした人々に出会うと、内心『ほっと』する一瞬がやってくるのです。

これから会いにゆくイッサ・アムロ氏は、「Youth Against the Settlement (YAS)」という団体のリーダーとして、「占領反対」「パレスチナへ自由を」「シュハダ通りを解放せよ」などを主張し、国内外と連携を取りながら精力的に活動を続けています。勿論、イスラエルによる逮捕・投獄は、数知れずです。

坂道を登り、やっと彼の「事務所」に到着しましたが・・・イッサ氏は、不在・・・。



ヘブロンで「反占領」をかかげて闘う
イッサ・アムロ氏

事務所の庭で待つことに・・・しかし、間もなく入植者の列が現れ、ゾロゾロと100人を超える若い入植者（若いものほど凶暴な入植者である傾向があります）が、「事務所」の下を通って行きました。私達を横目に見ながら、イスラエル兵の「護衛」付きなのです。

かれこれ30分位が経過・・・イスラエル兵がこちらを意識して覗いているので、「何か、事が起き取るまじい」との判断で「YAS事務所」を出ざるをえませんでした。

昼食後、イッサ氏と連絡をとると・・・EUの代表団の視察に同行しているとの

返事がありました。何とか会えないものかと再度、あの「いやな環境」に行かざるを得ない決断をして、4人で検問所に向かっていると、イッサ・アムロ氏に偶然会うことが出来たのです。

「幸運」を慶びながら・・・持参した「薬」を渡し来年の再会を約束して、超多忙そうなイッサ氏と別れたのでした。

聞くところによると、来週イスラエルの法廷でイッサ氏の裁判があり、もし「有罪」となれば、またの投獄が免れず YAS はもとよりパレスチナ人にとっても大きな試練が付きつけられるのです。

夕闇せまる中をバスを乗り継ぎ、検問所を通りぬけてエルサレムの宿舎に着いたのは、午後5時半を過ぎていたのです。

18日目 11月20日(日)

～私達の「医療支援活動」の出発点、ジェリコ・アクバドジャベル難民キャンプ診療所へ～

今日は、明日予定しているジェリコ、アクバドジャベル難民キャンプ診療所での診療のため、ジェリコへ移動しました。高々20～30kmの移動でも直通の公共交通機関はなく、バスを乗り継いで移動となります。ところが、サリム先生が、奥様とお孫さんを連れて宿舎まで迎えに来てくれたのです。これは、直通可能な移動手段です・・・サリム先生に感謝です！！

死海が近くにあるジェリコは11月でも汗ばむ季節です。温暖で果物・野菜の生産も盛んで、治安も悪くありません。しかし、隣接するヨルダン川渓谷へ行くと、そこは行政も治安もイスラエルが支配する「C地区」なのです。ここでは、パレスチナ人の「家屋破壊」や「水源の奪取」がイスラエル兵と入植者によって「自由」に行われている、パレスチナ問題の象徴的な地域です。今後とも目を離せ

ない重要なところなのです。

同時に、ヨルダン川溪谷には、イスラエル空軍を中心とした軍事施設が密集し、「戒厳令」的に緊張の強い地域でもあります。時々、空を切り裂くようなジェット機の急発進が繰返されています・・・急に「軍事」を思い起こされる瞬間です。

ところが、到着したホテルは、1泊4～5万円の高級リゾートホテル・・・とっても「奉仕団」とは不釣り合いのホテルなので、他のホテルを探すことになりました。見つけたのがサミーホステルで1泊3,000円のホステルでした。実は、このホステルは5年前に最初にジェリコに来た時に泊ったところでした。当時は、毛布をたたくと埃が立ったことを思いながらも、チェックインしました。

この間の待ち時間を活用して、パレスチナ警察大学校教授ラジャさんが私達に会いに来てくれました。ラジャさんは、以前北海道大学教育学部・姉崎先生のもとへ留学経験があり、その時にお知り合いになったのです。勿論、私達の活動に設立時から大変理解があり、地元では、大変な名士なのでこれからもお世話になるのです。

さて、ホステルと言えば・・・ロビーでの様々なまとめ作業を終えて、夜12時過ぎに私の部屋へ戻ると、3つの簡易ベッドすべてに「蟻の様な小さな虫」が発生しているではありませんか・・・



ジェリコ・アクバトジャベル難民キャンプ診療所で服部先生と子供たちを診療

難民キャンプにある宿泊所なので贅沢は禁物と「小さな虫」たちと仲良く眠ろうと思いましたが、全身が痒み発症。ここでは、虫から逃げて、ロビーへ退散する羽目になりました。それから朝7時まで、ロビーの一人掛けのソファで仮眠することになりました。しかし、よく考えてみると、こうしたことは日常茶飯事なはず、8時からの診療に向けて心と体をギアチェンジして、アクバドジャベル難民キャンプ診療所へ出かけました。

19日目 11月21日(月)

～ジェリコでの診療 ジュベ医師と再会し服部先生の協力で無事完了～

今年の6月、新築なったニュー診療所・・・清潔で広々とゆとりある作りでした。

まず、新所長に挨拶に行くと、昨年ガザ地区リーマル診療所でお会いしたマヘル先生でした。ここでの偶然の再会ですが、初対面ではないので、話がスムーズに進み診療に入ることができました。診療時のアラビア語～英語の通訳は、5年前から助けてくれている看護師のフーフさんです。

腰痛や肩こり、膝痛の患者さんを見ていると前所長で5年前に「医療奉仕団」を快く、親切に受け入れてくれたジュベ先生が診察室にやってきて、お互い無事

の再会を抱き合って喜び合うことができました。

そして、またこの日も服部美貴先生と一緒に診療することが出来たのです。服部先生は、2歳のお嬢さんを後部座席のチャイルドシートに乗せて、自らの運転でエルサレムからジェリコへやってきたのです。物静かで、地に足のついた、しかしその中に秘めている若い情熱を感じさせる女性医師です。服部先生との今回の「共同作業」を通して、私は、「医療」とは、「難民医療支援」とは、をあらためて考える機会を与えていただきました。先生はもとより、「支援」していただいた御家族にも心から感謝です、ありがとうございました。

私達がジェリコでの「医療支援活動」にこだわる理由は、5年前に「奉仕団」を結成し、活動場所を決めるために、ヨルダン川西岸自治区でおよそ10か所の病院・診療所を廻りました。その時、ジェリコ・アクバドジャベル難民キャンプ診療所の所長（当時）ジュベ先生が快く受け入れてくれたのです・・・ここは、私達のパレスチナ医療支援活動の始まり、いわば、活動の『原点』となっているからなのです。

こうして、「第8次医療・子供支援活動」もすべての行動予定を終了出来ました。

当初に設定した目標よりも多くの充実した「成果」を得ることができました。

これも、「奉仕団」の活動を支援してくれた皆様の協力によるものです。心から感謝申し上げるとともに、帰国後、1人でも多くの皆様に「パレスチナの実情」を届ける活動を行います。

(2017年10月、モハンマド医師、アフメド看護師、ムラド薬剤師の来日が実現することができました)

これからもよろしくお願いいたします。

「北海道パレスチナ医療奉仕団」 団長 猫塚義夫

第8次パレスチナ医療・子供支援活動報告

白山 晴雄

活動内容と場所：

※ヨルダン川西岸 → ①エルサレムのシュファト難民キャンプ ②ジェリコのアクバドジャベル難民キャンプ (共に医療・子供支援) ③ヘブロン市、入植者との戦うイッサ氏 ④ビリー村、平和デモ参加 ⑤ベドウィン(砂漠の遊牧民) 集落への検診、⑥イスラエル人と占領反対運動支援
※ガザ地区 → ①リマール難民キャンプ診療所 ②ハンユニス・難民キャンプ診療所 (共に医療・子供支援) ③クエート病院

1、はじめに・「パレスチナ占領という現実」

今回の支援活動で、表題の通り8回にもなります。

こうして活動が出来るのも、皆様の熱いご支援があるからと、いつも感謝しています。

かれこれ、パレスチナへ通い始めて10年近く経過したことになります。

残念なことに、訪問する度に、イスラエルの軍事支配(=暴力行為)がエスカレートしています。

まず、パレスチナ問題の「歴史経過」と「最近の動き」を、簡単に、振り返ります。

その次に、今回の支援活動で、特に印象に残った事の御報告をいたします。

イスラエル建国のこと

ユダヤ人がヨーロッパを追放されて、イスラエルと言う国が、暴力でパレスチナに、出来たのが1948年(昭和23年)。その後、1967年(昭和42年)の第三次中東戦争で、パレスチナはイスラエルの軍事占領下に支配されました。其れから今年で丁度50年が経過で、長い不条理です。

国際社会は、前世紀の異物とも言うべき、この「軍事占領」について、黙認・放置し続けています。そこに、パレスチナの悲劇が解決できない理由があります。

なぜイスラエルは中東に建国したのか

1882年、ロシアの皇帝が暗殺されました。犯人はユダヤ人だ、とのデマが流されて、「ユダヤ人の虐殺事件=「ポグロム」が各地で引き起こされました。この事件以降、少数ながら、ユダヤ人のパレスチナへ移住が始まりました。1897年に、「シオニスト会議」が開催され、明確な政治運動として「パレスチナにユダヤ人の国家建設の運動」が始まりました。この運動を「シオニズム」といいます。その後、キリスト教徒の「ユダヤ人苛め」は、第二次大戦中に、さらにエスカレートし、ドイツのナチスが「ユダヤ人狩り」で、600万人を殺害しました。シオニストはホロコーストに反対せずに、ナチスに働きかけて、ユダヤ人をパレスチナへ移送する協力「ハヴァラ協定」(1933年)を締結。これを機に、一気に、ユダヤ人のパレスチナへの大進走が増大しました。このホロコーストの恐怖が、シオニズム運動と「イスラエル建国」を大きく前進させました。このシオニズム運動を確実に進める人を「シオニスト」と呼びます。肝心なことはイスラエルの「ネタニヤフ政権はこのシオニズムを奉ずる政権」です。ですからネタニヤフ政権は、「土地奪いを目的にする政治権力」で、ユダヤ教とは、ほとんど関係ありません。

イスラエルの軍事支配が強くなるのは、なぜ？

それでは、なぜ訪問する度に、イスラエルの軍事支配が強力になるのでしょうか？

国際社会の黙認を良いことに、アメリカとの軍事協力・強化を増大させて、資金援助を仰いでいるイスラエルは毎年、3,000億円以上の軍事支援がほぼ現金でアメリカから受け取っています。その豊富な資金が軍事強化の予算に十分に使え、アメリカの支援は既に50年間続いています。

信じられないことだけれど、アメリカのユダヤ資本・金持ちは、長年にわたりアメリカの政治権力を支配してきました。誰が大統領になっても、「イスラエルへの忠誠心」は変わらないのです。

特に、アメリカのトランプ大統領の就任(今年の1月20日)からは、ネタニヤフ首相が強気になって、パレスチナの軍事支配強化が増大しています。(トランプの娘・イヴァンカさんの婿殿・クシュナーさん=熱心なユダヤ教徒で、その家族はネタニヤフ首相と昔から深い交流があったようです。)

御存知のように、トランプ大統領は就任早々、アメリカ大使館をエルサレムに引っ越すと、発言したり、中東で引き継がれている政治慣行を無視する思いつき発言で、混乱を巻き起こしています。このような「イスラエル支持のパフォーマンス」で、ネタニヤフ首相へ無言のエールを送っています。

「国際社会の黙認」とは何でしょうか

1948年に、イスラエルがヨーロッパのキリスト教徒から最終的な「ホロコースト」と言う大量殺戮で、追放されまし

た。その結果、急に、中東のアラブ社会（イスラム教）に、ユダヤ教という「異物の国家」が軍事的に建国されたので、戦争が引き起こせられて、「中東は世界の弾薬庫」と化しました。しかし、アラブの国が何度戦争をしてもイスラエルには、歯がたちません。最後には、アメリカの強い指導もあって 1979 年に、エジプトがイスラエルと「平和条約」を締結。1994 年にヨルダンが「平和条約」を締結しました。もともと、アラブ世界も一枚岩ではなかったけれど、現在は、以前の「天敵イスラエル」よりは多数派・スンニ派の国々と、同じイスラム教の少数派イラン（シーア派）との関係が大変危険な危機に陥っています。御存知のように国交断絶問題がクローズアップされています。

このように、以前の国際関係が 70 年の時間経過で、大きく変化して、イスラエルと言う国家がアメリカの覇権をバックに、いつの間にか国際社会の地位を築いて、得意の軍事分野とインテリジェンス分野で押しも押されもせぬ存在感を築いて、その一方で、パレスチナに対する「民族浄化＝エスニック・クレンジング」と言う反人類的な日常的軍事・暴力を継続しています。

「神殿の丘」の軍事支配強化の動き

アメリカの強力な支援を受けているシオニストのネタニヤフ政権はパレスチナの軍事支配を続けています。パレスチナ自治政府の軍事力は、世界のベストテンに入る軍事国家のイスラエルには、到底太刀打ちできずに、もっぱら「平和外交」で現状打破を考えています。それを良い



パレスチナ人、祈り中催涙弾を打込むイスラエル兵

ことに、入植地に住宅を建てて、一方的に、パレスチナ人の土地を奪っています。最近では、更にその軍事支配を露骨に強化し始めました。その代表的な動きが「聖都エルサレムのイスラエル化」で、宗教施設「神殿の丘」地区の軍事支配です。

1967 年に占領が始まり、エルサレムは西地区（＝以前はヨルダン地区）も東地区もイスラエルの軍事占領下に置かれました。それ以来、イスラエルが実効支配の中、唯一思い通りにならなかった「神殿の丘」地区への軍事支配を強化し、特にこの 3 年、従来の「宗教者による慣行の宗教的管理」を無視して、入植者とイスラエル兵士が毎日岩のドーム地区を警護しています。

約 1 Km 四方の旧市街の城壁の一番にぎやかなダマスカス門から、「嘆きの壁地区」までの約 500m の通路には、空港と同じ金属探知機を 20m ごとに設置し、警備の完全武装の兵士の数も、延べ百人以上、観光客に混じって、普通に暮らすパレスチナ人の男性を鋭い監視の目でらみつけ、理由もなく、自由に、いつでも尋問し、逮捕（行政拘留）することが出来る法律を駆使しています。



ダマスカス門の正面の警備の兵士たち

2、今回の活動で、報告したい「問題の現場」

①、子供たちが 4 人殺された悲しみの三家族・親戚訪問 (11 月 8 日、ガザ地区のガザ市内)

ガザに入ってから 3 日目の夜、元国連のガザ地区の保健部長のマカドゥマさんの案内で、2014 年のイスラエルに因る「ガザ空爆」時に、あわせて 4 人の少年



殺されたイスマール君 12 歳の遺影が空爆で殺された家族に、当時の様子を聞くことが出来ました。

ガザの中心地にその家はあった。私たちが来ると言うので、遺族の三家族が既に集まってくれていた。ガザの人たちは子供が多い。平均で 7.7 人と言う。

事件は 2014 年 6 月 16 日に起きた。場所はガザ市内の、海岸で親戚同士の従兄弟たち（小学生）がサッカー・ゲームを楽しんでいた時に、戦闘機の射撃で殺されてしまった。殺された子供のお父さんたちが、涙を流しながら、当時の話しをしてくれた。



三家族の人たちから事情を聞いているところ。

理不尽な死者をパレスチナでは美しい遺影を作って飾る習慣があります。

②、イスラエル軍事基地の兵士から毎日「出て行け！」と脅されるベドウィンシオニズムの人たち (11 月 17 日、エルサレム郊外の部落で、お話を聴いた)



中学生の少年を尋問に！その写真を撮った私を威嚇する兵士



アナトート基地の全景

毎年、シュファット難民キャンプ診療活動とセットで、必ず「遊牧の民ベドイン」さんの診察も行っている。自らも難民でありながら、いつも弱い立場の人々へやさしく支援の手を差し伸べるサリーム先生が企画し、協力する診療活動です。この「遊牧民のベドイン」さんたちは、とても厳しい状況です。

勿論、定住をしない遊牧民なので、羊たちを放牧しながら生計を立てています。難民でもないから、国連の保護の対象ではない。しかも、イスラエル兵士が仮の住まいの廃材を寄せ集めたような家を壊して、追い出そうとするから、何時も弱い立場です。近年はイスラエルの道路網が羊の放牧に邪魔をして、定住に切り替えるベドインもいます。今回はフェダッさん家族の診療です。訪問診療の時、サ



追放の攻撃を受けるテイルフェダッさんのサリーム先生通訳で、軍事基地の兵士たちから日常的な「土地奪い・追放攻撃」に晒されていることを知る事が出来た。①毎日のように基地のスピーカで「早く出て行け！此処は俺たちの土地だ！」と大音響で言われ続けるそうです。②兵士に銃を突きつけられて「お前は1シェケル(約30円)の価値もない出てけ！」③庭で買っている鶏に対し毒のえさをまかれて殆ど殺されたり④夜中に豚を放たれて(イスラム教徒も、ユダヤ教徒も禁忌の動物

だが)畑の野菜をぐちゃぐちゃにされたり⑤出て行けば金を出すとが、攻撃は毎日続いています。

③、凶暴な入植者、イスラエル兵士と毎日対峙するヘブロン市の「反イスラエル運動」の中心的人物イッサ氏の診察(腰痛)と支援活動で11月19日ヘブロン市を訪問しました。

西岸地区のパレスチナ中で、人々の暮らしを押しつぶす暴力事件が、日常的に引き起こされています。その中でも1994年以降から、現在まで集中的に継続されて、入植者のがはげしい暴力事件が拡大している地区が、このヘブロン市にある「シュハーダストリートとベイトロマーの地区」です。

1994年2月に、イブラヒーム・モスクに、アメリカの狂信的な入植者が機関銃を持ち込んで、朝の礼拝中のイスラム教徒を乱射し(29名死者150名以上負傷者)、て以来、この地区は一挙に、大紛争地となりました。

当時は、西岸地区全土に戒厳令が長期に亘り敷かれて、苦しい日々で、買い物も仕事にもいけない状態に置かれました。イスラエル当局はヘブロンにいる300名の入植者を守るとの理由で、千名以上の兵士を駐留させ、それ以降一気にこの地区が先鋭化され、暴力的シオニスト入植者のメッカと注目を浴びてきました。

下の写真は、この項のタイトルにある「イッサ氏」の現在戦っている土地奪いの現場写真です。



イッサ氏の現在闘っている土地奪いの現場写真

パレスチナ人が所有しているオリーブの庭に、毎日プラスチックの白いイスとテーブルを庭へ持ち込んで三食の食事をします。訪問した時には、百人近くも入植者がいました。当然その入植者を守ると言う理由で、数十名の完全武装の兵士が周りを警備します。イッサさんたちは武器も持たずに、庭の隣の小さな家に、事務所を作り、言論だけで、せいぜい10人の少数の仲間と、被害にされている家族と共に、暴力的な入植者と対峙しているのです。以上が今回の最先端の現場報告です。

下の写真はヘブロンの入植者とイスラエル兵士が日常的に暴力をふるいます。その暴力現場では、ヨーロッパを中心とするNGOなど中心に「暴力反対ウォッチング活動」を行っています。そのメンバーさんとのもの。



NGOメンバー

次の写真はイスラエルにより閉鎖されているシュハーダ通り。



閉鎖されているシュハーダ通り

付近には沢山のパレスチナ人が住んでいます。その住人たちが買い物に行く時など、毎日検問所を通ります。IDカードは大切です。

(以上)

第8次パレスチナ医療・子供支援活動報告

齋藤 育

1. はじめに

私は昨年、第8次パレスチナ医療支援活動に参加し、初めてイスラエル、パレスチナ行政自治区へ行き、たくさんのパレスチナの人々に会いました。そこで見た光景、話をした内容はどれもとても印象的でした。特に東エルサレム地区にあるシュファアット難民キャンプにある幼稚園の子ども達との出会いで更に私自身のパレスチナ支援を今後も継続していかなくてはならないという気持ちが高まりました。そして、その時の気持ちを胸に、今回第8次パレスチナ医療支援活動に参加し、また新たなパレスチナを見たり、パレスチナの人々と巡り合ったり、様々な思いを耳にすることができました。

2. 初めてのガザへ

(i) 私とガザとの出会い

私は以前、青年海外協力隊としてヨルダンにあるパレスチナ難民キャンプで、障害のある子供たちにアクティビティを

提供する活動していました。この難民キャンプは、ガザ難民キャンプと呼ばれ(難民キャンプが位置するジェラシュという地名からジェラシュキャンプと呼ばれることもある)、主にガザから移住してきた難民の人々が暮らしていました。そして、ここの人々との出会いが、パレスチナの人々との初めての出会いであり、名前だけは知っていたガザというところを少し身近に感じられるきっかけを作ってくれました。

同僚からは、よくガザの話聞いていました。しかし、難民2世、3世の彼らは一度も自分のルーツであるガザへ行ったことがなく、また現状ではガザへ帰ることもできません。2014年のイスラエルによるガザ攻撃では、同僚の親戚も亡くなり、とても悲しい夏を過ごしたことを覚えています。そして、いつか話に聞いたガザというところを自分の目で見てみたいという思いをこの第8次パレスチナ医療支援で現実にすることができました。また、今回ガザへ行ったことを同僚に伝えると、自分が行くことができたかのような気持ちで喜んでもらい、支援活動以外にも自分が行った意味があったことにうれしく思いました。

(ii) イスラエルとガザ地区との検問所

イスラエルからガザ地区へはエレッツ検問所を利用して移動しました。イスラエル側はコンクリート製で立派な建物、かたやガザ側は鉄の支柱にトタンを乗せただけのとても簡素な造りでした。この現状から、ガザ側の深刻な物資不足がうかがえました。ガザ側へ向かうには、イスラエル側ではまず、出国手続きのため一人一人施錠された狭いブースの中でガザ地区へ行く目的などに関する聞き取りなどがありました。その後、イスラエル側の建物内の壁で囲まれた狭い廊下を抜け、ガザ側の屋外にある約1キロにも及ぶ通路を抜け、ガザ側の検問所で入国手続きを行います。イスラエルからガザへ行くときには、スーツケースをそのまま機械に通すだけの簡単な荷物検査しか行われませんでした。ガザからイスラエルへ戻るときには、自分の目が届かないところで荷物検査が行われました。スーツケースは開けられ、中に入っていたものはすべてスーツケースの外に出され、ぐちゃぐちゃの状態では荷物は帰ってきませんでした。ここでは、ガザ産の食品関係のものが2点没収され、手元に戻ることはありませんでした。

(iii) ガザの街

私がこれまでイメージしていたガザは、私が以前活動していたヨルダンにあるガザ難民キャンプのような場所で、道路は舗装されておらず、トタン屋根の家がほとんどで、誰もが貧困と直面しているところであると思っていました。しかし、私が初めて見たガザ中心地の様子は違いました。中心地にある大学周辺はた



くさんの若者であふれ、お店が連なってある商店街は人でにぎわい、浜辺にある高級ホテルのカフェには連日入れ替わり立ち替わりお客としてやって来るような場所でした。しかし、そんなイメージをもったのもつかの間、ガザ郊外にある難民キャンプの中に一步入ると、これまで見てきた難民キャンプと同様、インフラが整っておらず、人口が密集している様子はやはり私がイメージしていたガザその物でした。ガザの街ではとても大きな貧富の差を感じました。

3. ガザでの出会い

ガザでの活動期間中、2軒のお宅にお邪魔させていただく機会がありました。その2軒は共に2014年に行われたイスラエルによるガザ攻撃によって被害を受け、家を失ったイマーンさんの家族と、命を奪われたムハンマド君の家族です。

イマーンさんの家はイスラエルの攻撃によって破壊され、家族が住める状態ではなくなりました。そして、その攻撃から約2年が経ち、イマーンさんの家は再建されていましたが、家の周りのあちこちには、いまだ銃痕がいくつも残り、当時の悲惨さを2年後の現在でも思い起こすことができました。

ムハンマド君は自宅近くの浜辺でいとかや甥とサッカーをして遊んでいるときにイスラエル軍による空爆があり、その

犠牲となりました。この親族はムハンマド君を含む、4人の少年を失うことになりました。家のリビングには簡易ライトを使って照らされた、ムハンマド君の遺影が飾られていました。ガザでは、1日に利用できる電気の利用時間が決められおり、供給される電気が利用できない時間は、自家発電機を利用して常にムハンマド君を照らしていました。

それぞれの家族と一時を過ごし、2014年の攻撃の悲惨さを知ることができました。ここでそれぞれの家族から話を聞いて印象に残ったことは、2014年におこった事実が風化していき、ガザが攻撃を受けたことが世界の人々から忘れられる日が訪れるのではないかと心配していたことです。どちらの家族にとっても2014年は忘れることのできないとても悲惨な年でした。このときは、たくさんのメディアがガザにことを取り上げていましたが、今ではほとんど、日本でガザのことを耳にすることはありません。確かに世界中でたくさんの悲惨なことが起きているこの世の中ですが、今なお復興が終わらないガザのことを一人でも多くの人たちが思い、寄り添い、忘れないでいることが遠い日本にいる私たちに出ることであると考えさせられました。

4. 平和への壁画活動

私が今回の第8次パレスチナ医療支援

で行った主となる活動は、難民キャンプ内において平和を象徴とした壁画を制作することでした。活動場所は、ガザにあるシャータィ難民キャンプと東エルサレムにあるシャファアット難民キャンプ内にある診療所で、どちらでの活動もたくさんの子どもたちやその保護者が参加してくれ、大盛況に終わりました。この活動は、猫塚先生による診療活動と同時にやっているため、一人ですべてを行うのはとても大変でしたが、子どもたちの笑顔が疲れを忘れさせてくれました。出発前の報告会を始め、たくさんの方々に協力してもらって準備した、日本からの手形も無事それぞれの診療所へ届けることができました。これまであまり目にしたことのない日本語にみんな興味をもち、日本語のメッセージを訳して伝えると、とても喜んでいました。

この活動で私が目指していることは、診療所に来る患者さんや子どもたちに楽しいひと時を過ごしてもらおうことと、壁画を見て少しでも辛い現実を忘れてもらえるような気持ちになってもらうことです。また、会話を交わしながら交流し、遠い日本からもパレスチナのことを思っているという気持ちを感じてもらえればと思って取り組んでいます。多くの人たちは、この活動に興味を示し、話をして笑顔で別れていきます。しかし、中には心にズキンとささる言葉を同時に受け止めなくてはいけないこともありました。例えば、こんなことをしても何の役にも立たないとか、こんな活動よりもお金をくれと言われてたりしたこともありました。こんなときには、自分が何のためにこの活動をしているのかを、拙いアラビア語で一生懸命伝えていくことしかできませんでした。話をして、説明して理解してくれる人もいましたが、理解してもらえないこともありました。すべての人に理解してもらうことは難しいかもしれませんが、今後も子どもたちのたくさんの笑顔を引き出し、パレスチナのことを思っている人がいるということを伝えて





いければと思います。

今回は2か所の診療所で計3日間の活動となりました。当日の制作では計100人近い人たちが参加し、壁画を制作することができました。どちらの診療所の院長も喜んでくれ、無事成功に終わることができました。

5. パレスチナで行われているデモ活動

今回の第8次パレスチナ医療支援活動中には、パレスチナ行政自治区アイン村、東エルサレムのシーフジャッラーファ地区で毎週金曜日に定期的に行われているデモ活動に参加しました。これらのデモ活動は、イスラエルによる入植や侵略、家屋撤去などの反対をするために行われているものです。どちらもデモの参加者はパレスチナ人に限らず、世界各国から



同志が集まり、イスラエル人の方も参加していました。

アイン村で行われているデモに参加するのは、昨年に引き続き2回目となりました。前回のデモのスタート地点は、パレスチナ側の土地にイスラエル軍が侵入して待ち構えており、前進、停滞、後退をしながらの行進でしたが、今回はイスラエルの土地寄りのパレスチナ側からイスラエルの境界線まで歩いて行進することができました。毎週参加している人の話によると、その時々でイスラエル軍の出方が違うようで、毎回デモのスタート地点が変わるとのことでした。そして、今回は一番恐れていた催涙弾の使用はなく、もちろんパレスチナ側の人間とイスラエル軍とのにらみ合いや、子供による投石などはありましたが、比較的穏やかな様子でデモを終えることができました。

また、最近の村の現状については、数か月前より時折、真夜中にイスラエル軍による侵攻があり、何かしらの理由を付けて子どもを逮捕して連れさっていき、数日間から数週間拘束するということが起きているという話を聞きました。無実の子どもたちをイスラエル軍が不適切な理由で連れ去り、子供たちを両親から引き離し、イスラエルに対する恐怖を植え付け、若者たちを大人しくさせようとす

るやり方は何とも卑劣なやり方であると思いました。

東エルサレムにあるシーフジャッラーファという地区でのデモは、この地区の家屋撤去や入植地の反対を訴えるためのデモです。この地区では、今、急速にイスラエルによるパレスチナ人の家屋撤去や入植地建設のための準備などが進んでいます。何十年もその家に住んでいた家族に対し、ある日突然、その家はもともとイスラエルのものであったと言いがかりをつけ、パレスチナ人を追い出すのです。土地の権利書があったとしてもパレスチナ人が裁判で勝てることはほとんどないそうです。そして、奪った家にイスラエル人が住むことで、少しずつ少しずつこの地区がもともとイスラエルのものであったかのようにしていき、パレスチナ人が住みにくくなり、最終的にイスラエルによって土地が奪われていくのです。このような土地はパレスチナ内にたくさんあり、その一つ一つの場所で、デモという静かな戦いが繰り返されています。

6. さいごに

今回の第8次パレスチナ医療支援活動は、わずか10日間というとても短い期間でしたが、たくさんのいい出会いに恵まれ、計画していた活動も無事に終わることができました。そして、自分にとっての一番の収穫は、元同僚たちの故郷であるガザ地区へ行き、現在のガザの状況を自分の目で見て、自分に何ができるのかをじっくりと考えることができたことです。私一人ですることには限界がありますが、今後も北海道パレスチナ医療奉仕団の一員としてパレスチナへの支援を続け、一人でも多くの人々にパレスチナに関心をもってもらえるように活動していきたいと思っています。

「第8次パレスチナ医療・子供支援活動」報告

発行日 2017年9月

発行 北海道パレスチナ医療奉仕団

発行責任者 団長 猫塚 義夫

〒065-0019 札幌市東区北19条東22丁目5-13 ☎090-8274-3163

<http://www.hms4p.com> E-mail: hokkaido.palestine@gmail.com

支援募金振り込み先

振替口座: 02720-9-100675 振込先口座: ゆうちょ銀行 二七九店 (279) 当座 0100675